岡山理科大学紀要 第45号 B pp. 59-70(2009)

英語での他動性に対する規定について

河本　誠

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

(2009年9月30日受付、2009年11月5日受理)

概要

この考察の当初の目的は、put up with...の全体の意味（～を我慢する）が各単語の意味からどのように構成されているかを探ることであった。この考察の過程で、動詞に前置詞が直接続くときの前置詞の役割を考えることになり、その前置詞＋名詞の結合したものがいわゆる基本文型と呼ばれているもののOの位置に現れていると考えられる場合があることを明らかにする。そして、その場合、前置詞＋名詞は、名詞の目的語との間で意味の違いを生み出し、簡単な形で表現のバリエーションを広げる効果があることを明らかにする。特に注目に値する発見は、そのような結合において with と of は他の前置詞と異なり、動詞の直後の位置では意味が希薄になることがある、という特殊な性格を持っていることである。最後に、ここで考察した事柄というのは、一言でいえば動詞の他動性の部分に関する規定（指定）の仕方であったという認識に達した。

［1］前置詞の役割

まず、動詞を中心とした基本文型の中で、補語Cの先頭に現れる前置詞の役割に着目してみることにする。

ここで1つ断わりをしておく。動詞の直後に副詞が続いているとき、動詞＋副詞を1つの動詞と見なせるような場合、それもここでは単に動詞として扱うことにする。また、例文はすべて引用に載せた辞書からのものであり、どの辞書からであるかは一々触れないことにする。辞書の例文で、主語や、時制がないとき、それらを筆者が適当に補っていることを断わっておく。

事態の中での個体間の関係

a)　ＳＶＣ型のＣに現れる前置詞

(1) He is <u>in</u> the yard.

b)　ＳＶＯＣ型のＣに現れる前置詞

(2) Sheep provide us <u>with</u> wool.

(3) The shock robbed him <u>of</u> speech.

SVCの例文の前置詞については、なんら疑問、違和感は生じない。しかし、SVOCのCに現れる前置詞については、どのように理解したらよいのか、悩んだことがあった。単に動詞と前置詞との相関ということで片付けず、どこかに何かの必然性があるものとの前提で考えれば、provide（提供する）やそれに類似した動詞に対してはwithが、rob（奪う）やそれに類似した動詞に対してはofが使われていることから、これらの前置詞の働きが見えてくるようになった。それはこれらがSVOCと見ることができ、目的語Oと目的格補語Cのところが前置詞で結合した文（節）を形成し、それが動詞の表わす意味を補足しているということ。withは「一緒」という近接の意味を持っており、ofは「離れる」という分離の意味を持っているが、それら前置詞が目的語Oの名詞と目的格補語Cの中の名詞との関係を表している。つまり、動詞の意味に呼応するように、前置詞がそれら個体間の関係を示すようにwith、ofが出現している。まとめると、動詞を中心とした文型SVOCの中の目的格補語Cの位置に様々な語群が現れることがあるが、補語の先頭に前置詞がある場合、目的語Oが表す個体と補語Cの中の前置詞の後の名詞があらわす個体との関係を前置詞が表しており、OC全体が文（節）を形成し、それが動詞Vを意味的に補うように前置詞が選ばれる。

事態の中での動詞概念と個体の関係--- 名詞句構造の中の前置詞の関係と同じ

この考察で中心的に扱うことの1つは、次のような文である。

(4) He shot <u>at</u> a bird.

(5) He shot at a target.

即ち、他動性をもった動詞（他動詞）に前置詞が直接続く場合であるが、この場合の前置詞の役割が、先に挙げた SVOC の C の位置に現れる前置詞の役割と同じなのだろうか。SVOC の文では、OC の間に主語・述語の関係が成立するのだが、C の先頭に前置詞が付いている場合、O と C との間の関係は動詞 V が表す事態の下で 2 つの名詞の表わす対象間の関係になっている。しかし、動詞が表す動作、様態などの概念に対し、それに名詞が結合している面もあるであろう。(ただ、文全体はある事態を記述するものであるから、その事態を構成する名詞項目や動詞項目は、すべて関連づけられているとも考えられる。) この shoot at の例で見ると、前置詞は、名詞が表わす個体間の関係というより、少なくとも動詞と前置詞の後の名詞との関係を述べている度合いが高いと言えよう。ＳＶＯＣの文とみて、shoot の後に続くのは目的語の弾や矢であり、それらが省略されていると考え、ＯＣの間の関係を前置詞が述べていると見ることは強引過ぎるであろう。

他動詞的でありながら、このように名詞の形の目的語ばかりでなく、前置詞＋名詞が続くことがあり、また、１つの他動詞に対して、異なった前置詞が続くこともあり、次章で、そのような多様な例を見ることにする。特に、辞書において他動詞と自動詞＋前置詞の両方の用法が記述されている動詞に対し、それらがほぼ同じ意味を持っているような場合でも、少し用法が異なっているはずである。全く同じ意味用法を持った 2 つの異なったものが存在していることは考えられないからである。したがって、その違いが何かということになる。

また、本来（完全）自動詞的な動詞に対しても、動詞と前置詞を一体と見た場合、それ全体を他動詞と見ることもできるようになる場合がある。自動詞＋前置詞が他動詞的になることから、ここで考察しようとしている本来他動詞的と見られるものに前置詞が付いたものは、なおさら他動詞的になり、そのことは動詞＋前置詞を単にブラックボックスの塊と考えては何も見えてこないと思われる。そこを何とかしようとするのが次の分析方法である。

動詞＋（前置詞＋名詞）

通常の（動詞＋前置詞）＋名詞の区切り方に対し、あえて、このように区切って分析すると、どのような事実が浮かび上がってくるかを以後見ることになる。

事態の中の個体の関係などを表わす前置詞の役割についてもう少し見てみよう。

a)「自動詞的＋前置詞」

(6) He swam across the river.

(7) He swam the river.

b)「他動詞的＋前置詞」

(8) She met with criticism. （受動的に）批判をうける。

(9) She met criticism. （能動的に）批判にこたえる。

前置詞が、個体間の関係及び動詞概念と個体との関係を述べる場合があることを先に見たのであるが、上の across が入った例では he と the river が across で結びついていると見ることもできるが、動詞 swam と the river の関係が across で表わされていて動詞概念と個体との関係が述べられているとも見ることができる。下の例では、with は she と Criticism の関係を表している、すなわち、個体間の関係を表しているとも、meet と criticism の関係を表わしているとも考えられる。この場合、なぜ他動詞的な動詞の後に前置詞を持って来なければならないのか、また、なぜ with でなければならないのか、ということが大きな問題である。このように、動詞の意味に呼応して、前置詞が個体間の関係を表わすことが強かったり、動詞概念と個体との関係を表わすことが強かったりするような場合があるが、それは話者の意識のあり方に関係し、それらで明確に 2 分されるものではなく、両方の性質を持っている場合がほとんどである、と考えられる。どのような表現の視点の違いから、前置詞を伴うかどうか、また、どの前置詞を使うかが関係してくることを次章で見ることになる。

前置詞の他の場所での機能

動詞＋前置詞＋名詞は、動詞の名詞形が存在する場合、並行した名詞＋前置詞＋名詞で同じ前置詞が現れる。たとえば、believe →belief の場合などである。このことは名詞句内の前置詞を考える際にも、他動性という成分が関与してくるものと思われる。その場合、名詞＋（前置詞＋名詞）の結合（切り方）しか考えられないが、これは動詞＋（前置詞＋名詞）の結合（切り方）の分析方法を支持するものと言える。また、さらには形容詞を中心とした構造も同じように分析できる可能性がある。

(10) He is fond of baseball.

つまり、この考察の途中で気づいたことだが、be fond of のように形容詞と名詞との関係が of で表わされることがあるが、この of も動詞に続く前置詞と同じ原理が働いているのかもしれない。なぜ of が使われているのか、ということは、動詞に続く of と同じように考えられるのではなかろうか。

動詞が表す事態は、動詞の数ほどに異なっている、と言える。ある事態の中で、その中の要素である個体が認識される場合、それらは、通常、動詞に対する修飾語句として表現の中に現われてくることになる。前置詞は、個体と個体の関係だけでなく、個体と動詞概念との関係を表示する場合があることを認識したうえで、その用法を分類・分析することにより、他動性をもった動詞に続く前置詞＋名詞の塊を理解することができるのではないか、という見通しが得られる。

［2］動詞に続く前置詞の働き（意味、役割）

前章の考察に基づき、事態の中の①個体間の関係表示と②個体と動詞概念との関係表示という側面を確認しつつ、動詞の持っている他動性に関し、それへの意味的整合性という観点から、動詞の直後に前置詞が続く結合を分類してみることにする。以下の例文は筆者がこれまでずっと気になっていたものが多く、それらの自分自身での初めての整理になる。英語では、基本動詞を使った表現が非常に発達しており、日常会話での使用が顕著であるが、多くの研究者による指摘を待つまでもなく、このことは一目瞭然である。しかし、基本動詞が他の語と結合して 1 つの動詞句を形成している場合、その全体の意味が各語の意味を合わせただけではどうしても合成できそうにない場合が筆者には多々あった。後になって構成の論理に気づくことになったものも少なからずあったことを覚えているが、いくらかのものはずっと疑問が残ったままであった。これをなんとか解決しようとするのがこの研究の元々の動機であった。以下の分類は、動詞＋前置詞＋名詞で筆者が気になるものを取り上げ列挙したもので、すべての用法をカバーしているかどうかは十分には気を配っていないことを断わっておく。また、自動詞と他動詞という概念も定義し難い概念であり、ここでは定義までは踏み込まないでばく然とした意味で使っている。たとえば、目的語が省略されていると思われる場合や、目的語を取り上げる必要のないときなど、どちらに理解してよいか分からないからである。

1) part with 型（自動詞型）

(11) A good advertisement will make a person decide to <u>part with</u> his money.
（良い広告は、金を出してもいいという気にさせる）

(12) Japan <u>fought with</u> the US in World War Ⅱ.（第二次世界大戦で日本は米国と戦った。）

(13) I have <u>dealt with</u> this store for years.（私は何年もこの店と取引がある。）

(14) The flight <u>departs from</u> Tokyo for Soul at 6:15 P.M.
（東京発ソウル行きの便は午後 6 時 15 分に出発します。）

2) do without 型（目的語省略型）

(15) I can <u>do without</u> him.（あの人はいやだ。）

(16) If you can't get meat, you'll have to <u>do without</u> it.
（肉が手に入らなければ、なしで済まさなければならない。）

(17) Since I'm busy this week I can't <u>do with</u> visitors.
（今週は忙しいのでお客はご免こうむりたい。）

3) take to 型（主語再帰形省略型）

(18) Everybody <u>took to</u> him at once.（だれもが彼をすぐに好きになった。）

(19) We <u>took to</u> the streets.（我々はデモなどで街に繰り出した。）

(20) What time do we <u>get to</u> London?（ロンドンには何時に着きますか？）。

4) believe in 型（作用点指定型）

(21) I <u>believe in</u> Buddhism.（仏教を信仰している。）

(22) He <u>shot at</u> a bird（彼は鳥をねらって撃った。）

(23) Put the blanket in the bathtub and wash it by <u>stepping on</u> it.
（毛布をバスタブに入れて踏み洗いしなさい。）

5) do with 型（VO 分離型）

(24) I could <u>do with</u> a good night's rest.（一晩ゆっくり眠れたら悪くないね。）

(25) Your car could <u>do with</u> a wash.（きみの車は洗ったほうがいいね。）

(26) We should do away with these old rules. （この古い規則は廃止すべきだ。）

(27) I have done with the book. （その本を読み終えた。）

(28) That disposes of your point. （それできみの主張している点は解決する。）

1) 場合

ここでは、動詞の後に何か名詞の目的語を補って考えることは無理である。主語と with の後の名詞との個体間の関係が with で表示されている面が強い。Depart from の場合は、動詞と from の後の名詞との関係と見られる面もある。特徴としては、動詞が本来、自動詞的性格が強いことである。日本語でも同じように対応する文型が見られることから、日本人に大きな違和感は持たれないであろう。また、part については

(29) 日本から離れる←->日本を離れる

(30) There I parted from him. （そこで彼と別れた。）

(31) He can't part with his favorite old car even though it won't run anymore.

（もう走らなくなったのに彼はお気に入りの古い車を手放せないでいる。）

同じような意味で 2 つの前置詞の使用が可能であるが、個体間の同等の関係を基にした表現が with であり、物理的な移動の視点から表現しているのが from ぐらいの使い分けが考えられる。この場合も、前置詞は個体間の関係を表している面が強いと思われる。

2) の場合

これは動詞の後に名詞（目的語）を容易に補うことができるタイプである。目的語が省略されていることが明白で、具体的に述べる必要がないから述べないものと考えられる。したがって、その後の with...は副詞的に理解すれば全く問題ない。こう考えるのには次の具体例が参考になる。

(32) I can't do anything with him. （彼は始末に負えない［どうしようもない］。）

With の後の名詞と主語との関係は個体間の関係を表している面が強いといえる。

3) の場合

これらの動詞は元々他動詞と考えられ、動詞の後に主語の再帰形を持ってくれば元の他動詞の意味で理解できる。辞書などでは目的語がないから自動詞と分類しているが、他動詞が意志性を備えていれば（例えば take の場合）、それがこの場合にも効いていることが容易に分かる。たとえば get to の例では、主語の再帰形を目的語として補えば、get であるので「得る」で理解できる。この場合、get の元々の意味に意志性がないことがこの場合にも効いていることが分かる。このタイプは主語の再帰形と前置詞の後の名詞との個体間の関係を前置詞が表している。SVOC の O が S の再帰となっている場合である。

4) の場合

筆者による参考文献 6)では、前置詞句が他動詞の直後に来る場合があることを指摘し、これを新たな文型と認識することを提案した。個体間の関係ではなく、動詞概念と個体（対象）との関係を規定（指定）するために前置詞が使われている面が強いと考えられる。前置詞は動詞の動作の及ぶ場所を指定している場合が多いが、それ以外の用法もあるかも知れない。辞書では、このような動詞も自動詞と分類している。辞書の性格上、それも一理あると認めるものであるが、これらの動詞が合わせ持っている他動詞用法と比較すれば、動詞の意味に何ら違いはないと考えられる。

5) の場合

これが筆者には一番難しさを感じるタイプであった。この場合、前置詞付きでは、前置詞なしの場合と比べ、一言でいえば、事態の比喩的、抽象的な表現になっていることが感じられる。従って、機能的にいえば、動詞の使用される事態の数を拡張する働きを持っている、と言えるのではないか。4)のような in, at などの前置詞であれば、その前置詞の語彙的意味に焦点が当てられることになるが、前置詞 with や of は、他の前置詞と異なり意味的側面が弱いと思われ（第 3 章で詳しく述べる）、with や of を除いた場合とほとんど同じである。そうであれば、ここでの with や of はどのような働きをしていると考えるべきなのか（第 3 章で考察する）。4)のように動作の及ぶ対象を示してはいるが、場所的に指定しているとは考え難い（ただ、of については、元の「～から」という意味で、その面が見られるけれども）。そうすると、これらの前置詞は、単に通常の VO を分離するために使用されているとしか見ることができない。したがって、前置詞は個体と動詞概念とを結びつける役割であって、これはもしかしたら次の日本語に類似するかも知れない。

(33) 私はあなたを好きです。

(34) 私はあなたが好きです。

(35) 私はあなたのことが好きです。

(36) 必ず、水泳を好きにしてみせる。(英語の VO 型、無標形)
(37) 水泳は、子供の時は好きでした。(英語の VO 分離型)
(38) 子供のときは、水泳が好きでした。(英語の VO 分離型)

これらの 2 組の例では、それぞれ VO という関係は同一であるが、助詞などの部分が異なっているからである。ここでの with と of の用法は次章で詳しく検討することになるが、以上述べた理由で 4)とは異なるタイプと考えるものである。

以上、動詞＋前置詞＋名詞の用法を 5 つに分類してみたが、それらの間で筆者にはかなり明確な違いが感じられ、説得力のある分類になっていると思われる。

＜put up with, catch up with, keep up with の分析＞

(39) I have to put up with the bad weather. (ひどい天気だけどしようがないね。)

Put up with の put up は明らかに動詞＋副詞で、何かを up の状態にする、ということである。すると何を up にするのか、ということで、この「何」を考えようとすると、up の意味も具体的にはっきりせず、筆者は悩んできた。従って、先の分類の中でどのタイプか考えようとしてみると、分類 5)しか考えられない。すなわち、VO 分離型で

put up with A ≒ put A up

すると、put A up は物理的な up ではなく、比喩的、間接的な up という事態を述べているということになる。そうなると、「the bad weather を up の状態にする」ということ、つまり、「up の状態」が何を比ゆ的にでも指しているのかということになる。全体の意味が「我慢する」ということであることから考えてみると、最終的な結論は put up を「邪魔にならない状態にする」、すなわち「片付ける」という意味と考えざるを得ない。With が付いているのは「片付ける」という物理的動作ではないので、この分離表現となっているということで、何とか理屈が合う。

一方、catch up with (～に追いつく) についてはどうであろうか。

(40) I ran as fast as possible to catch up with her.

これは分類 1)の自動詞型を示しているものかと考えていたが、それでは with の意味が理解できない。catch 人 up だけで「～に追いつく」という用法もあり、やはり分類 5)の VO 分離型と考えるべきなのではなかろうか。辞書には up の見出しで〔到達〕(水準などに) 達して、追いついて、遅れないで」と説明している用例に catch up (追いつく) を載せていることもあり、catch 人 up (「～に追いつく」) の VO 分離表現と見なせばよい。もう 1 つの考えは、分類 3)のように catch up の目的語として主語の再帰形が省略されていると考えるものであるが、その場合、catch myself up はどう考えても意味的におかしく、このように考えることが無理なことを示している。

最後に keep up with についてである。

(41) I have to keep up with the times.

これを catch up with 型で理解しようとすると、ほぼ keep up the times と似た意味になるはずであるが、これは全く意味が異なってくる。ここでは、keep up の目的語としては、分類 3)のように主語の再帰形を補って考えれば (keep himself up)、with は近接で against (に対して) の意味で考えることができ、そうすると全体がうまく理解できる。したがって、keep up with というのは、put up with や catch up with と外見上、全く同じ語としての構成であるにも拘らず、意味的な構成という点では異なったものと結論付けられる。

また、次のような with が係わった文も同じように考えられるのではないか。

(42) Down with the tyrant. (暴君を倒せ。)
(43) Up with the anchor. (錨を上げろ。)
(44) Out with him. (彼を追い出せ。)
(45) In with it. (それを中へ入れろ。)
(46) Away with it. (それを取り除け。)
(47) Off with your coat. (コートを脱ぎなさい。)

＜Have to 型の分析＞

次の形も同じように分析できるかもしれない。

(48) I have to do something. （何かしなければならない。）

(49) He has only to work hard. （懸命に働きさえすればよい。）

辞書には、I have something to do.をこれら２つの例文の後に一緒に載せている。つまり、同じ have to の用法であると考えているようである。Something to do の場合は、to do が something を修飾して something to do 全体が名詞の塊を形成していると考えられる。それに対し、上の例文では、そのような something が省略されたものと考えることは、名詞句の中の主要部が省略されると考えなければならず無理である。また、to do something を副詞的に扱い、目的語を補うことも意味上から無理である。その目的語が指す対象が考えられないからである。

(50) I have *something* to do something.

結局のところ、to do something や to work hard の部分が目的語の位置を占めている分類 4)のタイプと考えなければならないのではなかろうか。To do...の部分は、to が元々前置詞であり、do は不定詞という名詞形であるから、構成上、これらは分類 4)に当てはまり、ただ、to であるから場所ではなく方向を示している点だけが異なっている。 前の例文を I have something to do. と同じ意味であると説明に利用するのはよかろうが、これとは構造が異なることをしっかり認識すべきである、ということになる。

［３］文型（構文）の中での目的語の位置

前章の分類 1)においては、動詞は自動詞的であり、前置詞＋名詞は副詞的に見えると述べた。それでは、他のタイプではどうなっているのか検討してみよう。

(A) --- 分類 1) ：（自動詞的） 前置詞＋名詞は副詞の位置、役割

(B) --- 分類 2) ：（他動詞的） 前置詞＋名詞は副詞の位置、役割

(C) --- 分類 3) ：（他動詞的） 前置詞＋名詞は目的格補語の位置、役割

(D) --- 分類 4),5) ：（他動詞的） 前置詞＋名詞は非副詞（目的語）の位置、役割

この時点で大きな問題は、（D）で「前置詞＋名詞」は目的語の位置にあると言えるのか、そうでなければどのような文型と考えられるのか、ということ。SVO という文型（構文）の O の中に前置詞＋名詞が生起することがあるとは筆者自身、これまで考えたこともない。O は、名詞でなければならないからである。英語では前置詞＋名詞の結合は全体として絶対に名詞とはならない。だから、目的語とは考えられないということになる。辞書もこの立場で分類している。筆者はこの部分を考察の流れから必然的に考察の対象としてみようとしているわけである。従来通りの動詞＋前置詞の結合したものを１つの他動詞とみなすというだけでは、決して分類（D)の特異性は理解できそうにない。

SVOC の C の先頭に前置詞がある場合、それは、動詞を中心とした文構造の補語 C のところに、目的語 O との意味関係を表示するものになっている。それと同じ理屈で、分類 D)では前置詞＋名詞が O の位置に入っている、と考えられないだろうか。分類(D)を見ると、正しくそのように考えられる。それらの前置詞＋名詞は、決して副詞とはみなせず、動詞に密接に結合していることが分かる。そこで、まず、O の位置とは何か、また前置詞＋名詞の中の前置詞の役割は何かを考察してみることにする。

(a) ＜動詞と目的語の結合（文型という位置による結合）＞

まず初めに、動詞の目的語とは何か、を探るために、次の wipe の例を見てみよう。

(51) wipe one's eyes=wipe one's tears away（目（の涙）をふく）

(52) wipe up spilt milk（こぼれた牛乳をふき取る））

(53) wipe one's hands on (with) a towel（タオルで手をふく）

(54) wipe a cloth back and forth over the table（布でテーブルをごしごしふく）

実際の発話では話者の視点に応じて、wipe(拭う)という動詞で表わそうとする事態の中のどの対象を目的語として据えるかが異なることをこれらの例はよく示している。先行研究からも明らかなように、目的語というのは、大体、事態の中で主語に次いでプロミネントな要素であり、動詞が動作を表わすような場合、被動作主が来るべきところである、ということであるが、表現の視点が異なれば、このように目的語が違った要素になり得るわけである。様々なものが目的語の位置に名詞として据えられるが、それと連動して、例えば on a towel や over the table のような事態の中の残りの要素が前置詞を伴い動詞に関連づけられる。この前置詞＋名詞と比較すると、目的語というものが、動詞に対し、目的語であるという意味以外には特別な意味はない、ということを我々に理解させてくれる。目的語が、SVO などの文型の中で持つ意味（構文の意味）でし

か意味を規定しない、とういうことになる。O の位置というのは、次の plant の例で分るように、動詞が表す動作の及ぶ対象であることに加え、せいぜい動詞の表わす動作の作用の全体性、完結性という意味を伴うことが共通した、残りの意味である、とまとめられる。

(55) Plant the garden with cabbages（ガーデンの全体にキャベツを植える、ということ）

(56) Plant cabbages in the garden（ガーデンの一部にキャベツを植える、ということ）

したがって、SVO などの構文（文型）というのは、S と V, V と O の意味的関係を細かく規定するものでないことが認識できたことになる！これは筆者にとって大きな驚きであったが、その点がメリットにもなっているとも考えられる。非常に多くの叙述したい状況（事態）に対して、それらの事態を他から区別するような形でこれまで多くの動詞が作られてきていると言える。それを単に SVO で表わすわけであるから、たとえば、V と O との意味関係は、細かく見れば存在する動詞の数ほど異なっていると言えよう。それを異なった文型や語尾変化で区別するとなると絶望的な処理能力、記憶能力を必要とするだろう。こう考えると、SVO という文型は、極めてシンプルであるが重要な叙述手段であることが認識できるのである。

(b) ＜動詞と前置詞＋名詞の結合（前置詞による意味的結合）＞

直前の考察と対比させて考えると、動詞の後に前置詞が来る場合には、その後の名詞と動詞との関係が前置詞で結びついているので、この場合の前置詞の働きを理解することが重要であろう。この場合、動詞と名詞の間には、前置詞による意味的結合になっているといえる。これは VO の結合の仕方とは異なった語彙による意味的結合である。そして、この前置詞＋名詞が副詞ではないことから、動詞に対し、VO の関係があるのかないのかが知りたいと考えるに至った。このように考え振り返ってみると、前章の分類 4), 5)で見たように、ほとんど VO の関係であると言ってよいように見える。

(57) The bill met with approval.

(58) The bill met criticism.

そうすると、前置詞＋名詞が、動詞の目的語という位置に据えられていると考えるのも無理ではないのではなかろうか。そこで、動詞の後に前置詞＋名詞が続いているとき、前置詞が結び付けるのは、当該事態の中のどの部分かということを突き止める必要があろう。このような視点はこれまで、全く取られていないのではなかろうか。

(59) He shot at it.

(60) He wiped over it.

前者では、at は直接的に he と it の間の個体間の関係というのではなく、むしろ、狙いと it との関係であろう。後者の例では、it とより直接的に関係するのは、he というよりも、むしろ、文には表れていないものである（個体間の関係）。これらにおいては、主語は共に行為者を示しているが、主語が前置詞による意味的叙述に直接関与する面は弱く、これらの動詞を使って表わそうとする事態の中の個体と動詞概念との関係を述べている面が強い、ということである。以上のことをまとめると、主語、目的語というのは、人間の理解しやすい文型を作り出す部品で、その組み合わせが SVO などの文型であるといえる。各動詞の表わす様々な意味にも係わらず、表現形式をほんの少数の文型というものに押し込めることにより、言語を使用する人間にとって使いやすいという結果をもたらしたと考えられる。そうすると、さらに細かく意味を伝えることを可能にするのが、目的語の位置に、前置詞＋名詞を持ってくる表現であると考えられる。He shot at it では、at it は副詞の位置ではなく、目的語の位置にあると考えれば、shoot という動作が it に及ぶが、その作用が及ぶ場所を細かく示すのが at ということになる。これで、この種の筆者にとって違和感のあった動詞＋前置詞＋名詞を理解することができ、日本語と比較して英語がこのような簡潔な形で表現のバリエーションを広げていることに驚かされる。

Do や dispose に対して、次に前置詞が来るとすれば、それぞれ何故 with、of であるのか、その理由をはっきりさせることも必要である。With は第 1 章で、動詞を使って表わそうとする事態の中で、個体間どうしの関係や、動詞概念と個体との関係を近接の関係で表わすものと考えられた。事態の中のものは、すべてが近接の関係にあるとも考えられ、それはあまり強い意味的な制限ではないように思われる。そのように考えると、積極的な意味での with の利用というより、間接性などを出すために何とか間に合わせの効く with の利用ぐらいに考えられる。Of については(f)で扱うことになる。

(c) ＜文型による結合と前置詞を使った意味的結合の二重性＞

１つの動詞に対し、動詞の後に前置詞が来るときと来ないときの両方の用法がある場合を見てきたが、そ

れらの使い分けに何か一貫性があるのだろうか。自動詞に対しては、主語と補語以外の名詞要素は意味による結合を使わざるを得ない。他動詞を基にした文型による結合では単純明快さというメリットがある反面、全体性、完結性などの意味を同時に伴ってしまう。この部分を補うのが前置詞による意味的結合である、ということになるかも知れない。いわゆる他動詞の目的語 O という位置に、前置詞による意味的結合を伴った要素が組み込まれていると考えると、前置詞＋名詞は副詞的な働きにならず、動詞と前置詞の後の名詞を VO 的な関係に保つ、しかも、その VO 的な関係が、前置詞の意味で結合されている、という二重構造になっていると考えられ、それですべてが納得できる。この場合の前置詞は、動詞によっては出現が制限されるが、動詞に対しなぜ前置詞かというのは、動詞を使って表現しようとしている事態の中での個体間の関係や個体と動詞概念との関係などが関係するのであるが、比較的自由に現れる、という印象を筆者は受けている。詳しいことは筆者の今後の研究の課題である。

このことを具体例で見てみよう。前章の分類 5）の例文

(61) You should do away with the old rules.

(62) I have done with the book.

では、通常、次のような説明がなされる。「これらは全体が群動詞になっていて 1 つの他動詞として機能し、各語は基本語であるため日常的に使われる平易な他動詞相当表現である」というように。このように全体が他動詞の機能をもった群動詞と見なせることに筆者は異議を唱えるものではないが、その意味的構成、つまりはこれが構成される原理がどうなっているのかが非常に気になってきた。そこで、

done away　with+the old rules

have done　with the book

のように分けて考えてみた場合、それはこれらの表現が持っている次の 2 つの面を共に説明してくれるものであることが分かる。

① 動詞の後に、直接、名詞の目的語を取る用法がある。したがって、前置詞はオプションである。

② そのことと関連して、前置詞を伴っていても動詞は他動性を持っている

この 2 つのことから、with...は、前置詞＋名詞であって全体は決して名詞にはならないのであるが、それが、動詞の目的語の位置を占めている。そう考えると、with...部分が do away や have done の意味分析上、内項的要素になっていることがうなずける。つまり、with...が do away の目的語という位置を占めることにより、do away の意味分析でいう必須項目になるという論理である。その点から再度見直してみても、前章の分類 4)と 5)では、前置詞＋名詞が目的語の位置に入っていると考えてよいと思われる。そして、それらが、第 2 章の分類の中で、正に、筆者が悩まされてきたタイプであり、動詞＋前置詞＋名詞を理解しようとするときの 1 つのネックになっていたと考えられる。

そうすると、目的語の位置に来るものとしては、単なる名詞（句）と前置詞句が競合（排他）関係になることを意味する。そして、この点で英語は、これらの共存を可能とし、意味の違いを伴った形での棲み分けを許容していると言えよう。これは、言わば、文型による結合と前置詞による意味的結合との融合と見ることもできるだろう。

自動詞、他動詞というのは、一応目的語を取るかどうかということの違いでもよいが、自動性、他動性という本質的に他への働きかけの有無と関係している。前章の分類 1)のタイプでは、自動詞＋前置詞＋名詞の形で、自動詞＋前置詞が全体として他動詞的になることを示している。つまり、動詞＋前置詞＋名詞において、名詞の側から見てみると、動詞自体が他動性を持っていてもいなくても、動詞＋前置詞を 1 つの群動詞と考えると、その後の名詞と VO という形になることが興味深い（異分析(metanalysis の一種)。このように一応つじつまの合った形で見ることができることが、逆に、他動詞＋（前置詞＋名詞）の解釈、分析を阻んできた要因と考えられる。

(d) ＜文型による結合と前置詞を使った意味的結合の同時出現＞

以上の考察から、英語の次のタイプの文が見えてくるのではなかろうか。

(63) He shot her on the head.

(64) He seized her by the sleeve.

これは英語の研究者を昔から悩ませてきたものであろうが、動詞の後に目的語と前置詞＋定冠詞＋名詞が続く形である。目的語の名詞が動詞の動作を受ける全体的な存在であり、その後の前置詞＋定冠詞＋名詞がその動作の中で具体的に作用を受ける部分（仕方）を表している。動詞の作用を受ける、この全体、部分の組

み合わさった表現は、次の例と同じ手法ではなかろうか。

(65) He is out in the yard.

全体的捉え方の out が先に来て、より具体的な場所指定の in the yard がその後に来る。前置詞＋定冠詞＋名詞の中の定冠詞は、全体を表わす her が先に出ており、その一部ということで the になっているだけのことである。このように考えると、shot の後の her と on the head は共に目的語の位置にあり、He is out in the yard. と同じように、全体、部分という表現方法の１つに過ぎないと考えられる。On the head が単なる副詞句と見ない形で分析できることが重要なポイントである。そして、これは言語感覚にも合致していると筆者には思われる。筆者は、これで初めてこの形を納得できた感を抱くことになった。

動詞に続く前置詞を考えることにより、筆者にとって英語における主語、目的語などの動詞に対する働きが逆にようやく見えてきたように思われる。これまで、目的語の本質は何か、という先行研究を見ただけでは決して認識することができない部分が浮き彫りになってきた感がある。たとえば、この考察をほぼ終えた段階での自動詞、他動詞の区別は次のようになる。目的語として話者の意識に現れる場合が他動詞用法、意識に現れないものが自動詞用法で、目的語がなくても、目的語を意識しているような場合は、他動詞ということになる。その意味では、他動詞に前置詞＋名詞が続く場合、表現しようとしている事態の中の何をイメージ（意識）しているかによって、「前置詞＋名詞」部分を目的語とみなせる場合があるということになる。このことに多少関連していると思われるものに次の形がある。

(66) To see is to believe.

To は元々前置詞で、前置詞＋不定詞（これは名詞形）が主語や補語の位置に現れている場合である。動詞の後の目的語の位置に、前置詞＋名詞を英語が許容しても不思議でないことを示している。

(e) ＜名詞句構造内での前置詞＋名詞の機能＞

名詞句内の構造も同じように考えられる。

(67) a shot at him

(68) belief in God

これらにおいて、at him は shot の内項的な要素である。動詞と対応する形の名詞については、動詞の場合と同じように前置詞＋名詞が内項表示を行うことがある！Belief は動作的な面を持った名詞であり、動詞の場合と同じように in God がその内項に当たると分析できる。これも筆者にとっては極めて新しいな認識であった。すでに研究されていることなのかもしれないが、以上のように動詞を中心とした造を分析してきた結果、名詞句内の構造も見えてきたわけである。この場合、belief を中心とした名詞句の中に VO のような動詞を中心とした文型（構造）の力はなく、前置詞による意味的結合のみが利用可能であるが、言語使用時には belief と God の意味的な関係を考えることにより、in God が belief の内項になっていると認識されると考えられる。そうすると、believe in God も、同じ意味で believe と God の意味から、最終的に in God が believe の内項表示になっていると聞き手の側は判断することになる。名詞句内に前置詞を使った内項表示、外項表示の区別があり、それが動詞句内と同じであることを理解すると、句構造がより的確に理解できるようになることが分かる。この句の間の並行性ということでは、かつて Jackendoff が構造上の並行性を述べたものを思い出すが、そこでは、内項、外項の意識はなかったのではなかろうか。

次のような変形を考えてみよう。

to destroy the building ←->the destruction of the building

動詞 destroy に対し、その（文型上の）目的語としての the building に関して、動詞の名詞形である destruction と the building との関係表示においては前置詞を使わざるを得なくなる。通常、動詞 destroy と目的語 the building とは文型という力で結びつけられているが、名詞と名詞を関係づけるのに、前置詞が必要であることを認識させてくれる。

前章の分類 4), 5)のものは、動詞の意味分析での外項ではなく、内項の位置を占めるもの、したがって、前置詞＋名詞は目的語と対等の関係（排他関係）にあるものと述べた。一方、日本語の助詞（てにをは）は、英語の文型を作り出すことに対応するものである。前章 4), 5)の前置詞＋名詞の前置詞の部分を助詞（「てにをはの」）だけでは対応できず、その結果、日本語訳は冗長な形にならざるを得なくなる。

(69) He shot at the animal. （彼はその動物を狙って撃った。）

(70) He never speaks of his dead daughter. （彼は死んだ娘のことを絶対に口にしない。））

細かな意味を区別する前置詞に対応する助詞は日本語にはないので、多くの語彙を使って表現せざるを得な

くなる。英語での動詞に対する内項規定である前置詞＋名詞が動詞に続くというのが、このように日本語に対応するものがないせいか、筆者にはなかなか受け入れ難い個所だったのだろう。しかし、shoot の名詞形に対しては shot at the animal のような名詞句が全く違和感なく受け入れられるものであった。それは考えてみると、名詞句としては語彙による意味的なものだけを元に解釈すればよいと割り切れるからではないだろうか。表面上、英語では、動詞と名詞の主要部に対し、同じ意味関係で前置詞＋名詞が連結することができ、動詞構造と名詞構造とが並行して形成されるが、動詞では動詞の目的語という文型的側面が入って来るので、その連結は実は単純なものではないことが分かる。蛇足であるが、前置詞＋名詞が動詞に対して副詞的な外項であれば、その部分は全く並行性が保たれる。

(f) ＜with と of の特殊性＞

次に、前章の分類 5)のところに現れる of と with について考えてみよう。筆者は of と with は名詞句の中で、他の前置詞と異なっていることに薄々気付いていた。Of は元々「～から」という意味で、「～の中」ぐらいが基本的な意味と言えるのかもしれないが、非常に多くの意味的関係（主格、対格を含む）のところに現れる。対格の場合は、名詞句の中で名詞を結合する of が、動詞と名詞とを結び付ける文型の役割に相当しているということを示している。意味的側面が希薄になっていて、それがメリットにもなっている。ところが分類 5)で出ている with の用法は、of とは異なり、名詞句の中の用法としては現れないという特殊性に気づくことになった。動詞を名詞に変換できる場合でも、主語と目的語だけがそれぞれ前置詞 by, of などを付加して対応しなければならない（このことが、英語の構文（文型）と言いうものが位置によるものであることを再認識させてくれるものとなっている）。まとめると、前章で述べた動詞に続く前置詞の分類 5)の with は、近接という程度の意味しかないが、分類 5)の用法としては決して名詞句の中に現れない。また、of も、名詞句内での意味希薄な用法が、それ以外の動詞句へ適用されるものと考えられる。分類 5)のように、with と of が動詞に続く場合、動詞の目的語という構造上の位置に、名詞が意味的要素（前置詞）を伴って組み込まれると考えられるが、前置詞の意味的側面が弱いのが特徴的で、他の前置詞と異なり、VO を分離するマーカー的な役割を果たすに過ぎないと考えられる。しかし、前置詞なしの場合とは形態が異なるので、やはりそれとの意味の分化が生じ、前置詞が入る場合は、主に抽象的、比喩的な拡張用法になっていると考えられる。

最後に、形容詞を中心とした構造もここでの考察に関連していると思われる。

(71) He is <u>fond of</u> baseball.

(72) He is <u>proud of</u> having married her.

上のような形容詞に続く前置詞＋名詞も、それら形容詞の動詞形、名詞形がそろって存在するわけではないが、前置詞＋名詞がちょうど動詞の目的語に近い形で働いていると見ることができる。

(g) ＜他動性の規定（指定）の仕方＞

ここまで考察してきたことが、<u>動詞などに対する他動性の部分に係わる限定・修飾である</u>と、最後になって気づいた。そうでないものは動詞に対して副詞（句）になるわけである。したがって、英語では、動詞などの他動性の規定（指定）が、そうでない修飾・限定と同じ形態（典型的には前置詞＋名詞）で行われるところに、筆者に難しく感じられるところがあったのだろうと、今、振り返ることができる。日本語では、他動性の規定（指定）の仕方がそうでない場合と異なっていることは、対応する英文の訳を考えてみればわかる。このことから、この考察が、日本語使用者からの視点で捉えられた英語の分析になっていれば、筆者にとって嬉しく感じられる。

まだ詰めてはいないけれども、<u>動詞、名詞、形容詞などが、他動性の意味を有しているときには、その部分を規定（限定、修飾、指定）する共通の形として前置詞＋名詞が使われるが、ここで示したように、それが動詞の目的語の位置を占める場合があると考えられ、その場合は、動詞に対して文型としての目的語 O と競合関係になり、有標の形になる</u>、ということになる。

動詞の直後に前置詞が現れる場合、動詞に対しどの前置詞が通常共起するかというのは、意味の上から決定されるという結論に至る。動詞を使って表現しようとする事態の中での個体間や、個体と動詞概念とに着目するのであれば、それにふさわしい前置詞が選ばれるものと考えられる。人間には、着目の仕方に共通性があり、それが前置詞の選択にも反映されると思われる。

参考文献

1) リーダーズ英和辞典　第２版　研究社
2) ジーニアス英和辞典　第３版　大修館書店
3) 河本　誠　“他動性を有する動詞に前置詞が続く構造に関する認知的考察”
岡山理科大学紀要　第３５号　B　pp.21-28　1999
4) 河本　誠　“前置詞 with の同伴性について”　岡山理科大学紀要　第３７号　B　pp.19-29　2001
5) 河本　誠　“事態への関わりを表すう with 句”　岡山理科大学紀要　第４２号　B　pp.41-50　2006
6) 河本　誠　“動詞性句から得られる英語の新文型の提案”　岡山理科大学紀要　第４３号　B　pp.51-58　2007

Modification on the Transitivity of Verbs in English

Makoto KOMOTO

Department of Socio-Information, Faculty of Informatics,
Okayama University of Science
1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan

(Received September 30, 2009; accepted November 5, 2009)

In this paper, I have dealt with the sequence of *verbs* and *prepositions* from the perspective of meaning. This sequence was classified into several groups here, some of which have bothered me for a long time because I couldn't construct the meaning of the sequence from combining the meaning of each word in it. One of the results from this research is that the combination of prepositions and nouns can occupy the position of O in the SVO sentence pattern. Another result is that the prepositions *with* and *of* are different from other prepositions when they appear after verbs in that they can become very weak in lexical meaning. The biggest result is that the combination of prepositions and nouns after the verb can modify or specify the transitivity of the verb instead of modifying the verb adverbially.